

## 8 長岡市出身の医学者・椰野直の筆記ノートについて

唐 沢 信 安

(一) はじめに

今から十年位前に、古書店で和綴じの筆記ノート三十六冊を入手した。

筆記主について調査した所、「吹雪貫陵」「南越吹雪常席上筆記」と記してあり、更に調査を進めた所、「満氏各論外科書、巻七、慶応二年卯年正月、南越・椰野」と記されており、長岡出身の医学者・椰野直なぎの たけし(謙秀)の遺品と判明した。

(二) 椰野直の幼年時代から長崎遊学前後迄

蒲原宏先生のご研究を参考にして述べると次の様である。

椰野直は、天保十三年三月十二日、新潟県古志郡富曾亀村大字堀金の近藤三省の四男として生まれた。嘉永五

年、十一歳の時藩医椰野恕秀の養嗣となり、謙秀と改名した。その頃藩校崇徳館に入り勉強す。文久元年、十九歳で江戸に遊学し、渡辺吉郎の門に入り、文久四年二月二十九日、江戸の緒方塾(適塾)に入門した。然し緒方洪庵は死去した後で、二男の緒方惟準について蘭学を学んだ。

慶応元年、藩の命令で長崎の精得館に学んだ。ポードインに従って蘭学の勉強を始めたが、翌年の慶応二年秋に何故か藩主牧野忠恭の命で、大阪から江戸迄行動を共にして、勉強を中断している。

翌慶応三年に至り、再び長崎の精得館でマンズフェルドに従って、慶応四年迄医学の勉強を続けている。

戊辰戦争が近づき、藩主から帰国を命ぜられるも、途中広島辺りで、官軍に阻まれて進退極まり、明治元年九月に漸く、長岡に帰りついたとの説がある。

手元の筆記ノート「内科書・巻一」の巻頭に「和蘭紀元千八百六十八年正月」とあり、慶応四年一月には、薩長連合軍と幕府軍との鳥羽伏見の戦争が開始されており、椰野直は逃げおくれたものと判明した。

北越戊辰戦争後、戦火で長岡の町は大部分焼失し、小林虎三郎・三島億二郎等の唱導で、明治二年五月一日、四郎丸の昌福寺に「国漢学校」を開校し、庶民の子弟を含めて教育を始めた。その時椰野の提言で「洋学局」と「医学局」が新設された。

この頃親藩の三根藩みつねより、「米百俵」が長岡藩に贈られた。米の代金二百七十両を国漢学校の書籍代や用具代にし、椰野は洋学訓導師・西洋医学教授試補として活躍した。

### (三) 東京医学校時代

新潟に明治三年に新潟仮病院が設立され、明治五年に竹山たけやま 屯とんの後任として椰野は二等主医として勤務している。

明治五年八月に辞職して上京し、明治六年二月、東京医学校でドイツ人教師ミュルレルに就いて、ドイツ医学を学んでいる。(当時同郷の長谷川泰は東京医学校の学事監督となり、少教授として活躍していた)

当時の筆記ノートと推察されるものは次の通りである。(一)ハルツホルン(明治六年 月七日、呼吸器)一冊、

(二)グレイ氏解剖学(視覚器・聴覚器)一冊、(三)達爾頓生理学四冊(明治六年三月五日)、(四)神経学総論一冊。

### (四) 長岡会社病院長及び軍医時代

椰野は長岡会社病院が明治六年六月に設立されるや、再び帰省して院長に就任している。翌明治七年には軍医となり、佐賀の乱に従軍し、明治十年の西南戦争には大阪鎮台病院に軍医として服務している。

明治十年十二月に、ベルツと川上清哉に先立って恙虫つがむしの報告をしたと伝えられる。

陸軍一等軍医正となり、明治二十二年に退職し、長岡で開業した。その頃「ランプの会」を興し、和歌をたしなみ、長岡の文化人として活躍した。明治四十五年七月七日、七十一歳で世を去った。

筆者の手に、長崎時代の筆記ノート「鵬氏眼科学」一冊「プレス解剖学書」「満氏外科書」「和蘭語単語帳」「原書 写本」一冊等多くの品々が残されている。

(日本医科大学)